

生研西へ羽搏く

東京大学名誉教授 (元第 4 部教授)

本 多 健 一



生研にはあしかけ 11 年在職させて頂いた。

第二工学部を生研の前身としてつなげて考えると学生時代、その後続いて研究員として定期的に伺った時代を含め 27 年間専門家としての大半を西千葉、六本木と生研にお世話になった訳である。思い出は限りなく、西千葉の松籟に始まり六本木の夜の灯に至るまで盡きることはない。

生研の活躍を拝見すると誠に瞠目すべきものがある。別にお世辞で云っているのではない。生研には優秀な方々が多勢いらっしゃる。だから傑出した研究が続々と現れることは寧ろ当然であって、私が申したいことは生研という研究者の集団として社会的に、適切で時宜をえた、また学術的に先導性のある研究課題を選びこれを推進していることである。

今生研から距離をおいてみて、このような生研の冠たる独自性は何処から生れたのか考えて見た。

(1) 緊張感と連帯感

第二工学部から生研への移行の頃は私は大学院学生であったのでその詳細は知る由もなかったが、全体をつつむ緊迫感、更には悲壯感を帯びた雰囲気は感じることができた。

この自己の存続に危機感を持たざるをえなかったことが緊張感をもたらし、また当時の一種の被害者意識が生研に働く者に連帯感を生じさせてくれたと思う。

現在、在職されている方で此の時代を御存じの方はもうおられないであろうが、その雰囲気は受け継がれているように思う。

(2) 無目的研究所と適正サイズ

生研は国立大学付置研のなかでは最大である。しかも生産技術というパラダイムはあっても一般的、抽象的であってこれだけでは社会の理解を得るような具体性に欠けている。

私は生研から工学部へ移ったので両者の比較が或る程度はできる。工学部は勿論教育という基本的違いはあるがそのサイズは生研の数倍はある。

木を見て森を見ずという言葉があるが、工学部では自分の専門という木一本を見て、立派に育てればよいのであって、学部全体という森は巨大過ぎて目が届かないし、また全員が森を見る必要もないように思う。これに対し生研では自分の専門の木と同時に生研全体の森がよく目にはいる。この点生研の規模は optimum である。

無目的研究所であるが故に、そのレゾナントルを絶えず模索し、主張しなければならぬ生研にとって、その multi-disciplinary な構造は主張と行動に移るのに最適なものと言えよう。

(3) rural 研究所から urban 研究所へ

西千葉から六本木への移転は大きな意義があった。これは単に、交通とか通勤のことをさしているのではない。

大学付置研でも研究目的が極めて特化しているところがある。こういう研究所は rural な場所の方がよいのである。

生研の場合、当然であるが、社会の進展に迅速機敏に、かつグローバルな視点より対応し、生研の果しうる役割を積極的に掘り出してゆかねばならない。社会もまたこのことを期待していると思う。

情報の受信、発信の中心、コミュニケーションの要に位置できる urban 型研究所はまた社会の現象を膚で感じさせ、研究を活性化させる刺激を与えてくれる。

urban 型と rural 型の研究所の是非については御意見の異なる方も多いと思うが六本木移転は結果的に見て大きなプラス効果をもたらしたと考える。

生研は更に西へと羽搏き、駒場の地に、今度は借物でない、本格的都市型研究所として根を下ろすことになる。今後一層の御発展を期して待つものである。